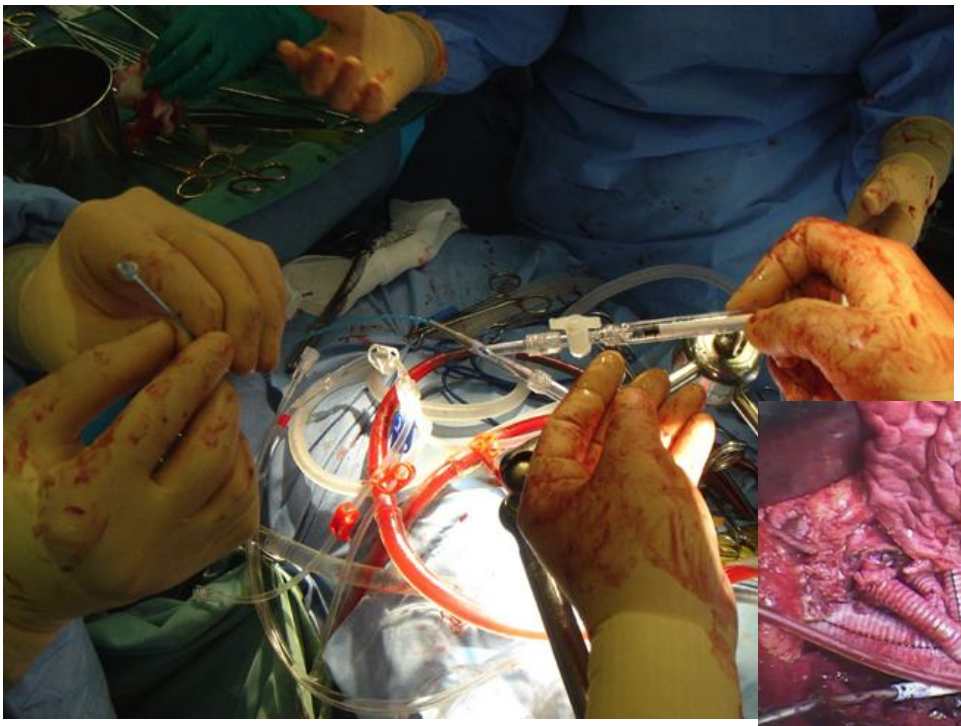
胸部下行および胸腹部大動脈瘤に対する術中選択的肋間動脈灌流法

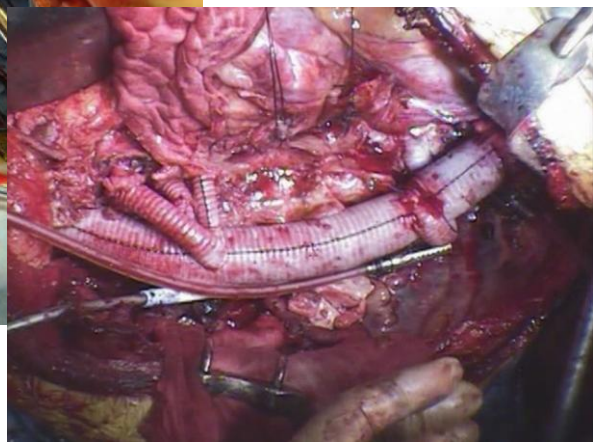
外科学第二講座　講師　川原田修義

近年、大動脈瘤外科治療全体の成績向上が得られているが、胸腹部大動脈瘤の外科治療は手術侵襲も大きく、その成績は決して良好とは言えない。特に、脊髄障害（対麻痺）の問題は重要である。ステントグラフト治療では脊髄障害の頻度が少ないと言われているが、open surgeryとの決定的な違いは大動脈遮断による虚血が生じないことである。そのためopen surgeryにおいて術中の前脊髄動脈がcollapseしないよう前脊髄動脈への血流を一定量維持することを目的に術中選択的肋間動脈灌流を新しく開発したカテーテルを用いて施行している。



肋間動脈灌流用に新しく開発したバルーンカテーテル

術中写真



術前3D-CT

術後3D-CT

川原田修義＜ nobuyosh@sapmed.ac.jp ＞